

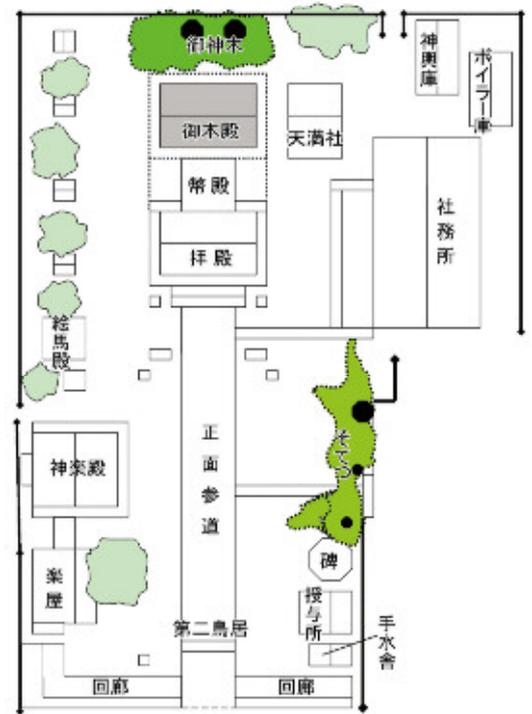
## (4) 三佐の人形山車にみる歴史的風致

### 1) はじめに

三佐地区は江戸時代には岡藩の領地であり、参勤交代の際に藩主の休憩所であった御茶屋や港、町場が整備された。港から参勤交代の「御座船」のほか商品や伊勢参拝の人々を乗せた船も出入した。区画整理が行われたが、現在でも江戸時代の町割りが残り、神社仏閣も当時の位置にあり、北側の海の近くは古くからの家が残されている。また明治大分水路(明治32年(1899)完成)が三佐地区の東西を通り海沿いの北へ流れている。

野坂神社のはじまりは永正年間(1504~1510)に海中から引き揚げた霊石を祀った、あるいは紀州熊野より熊野権現を勧請したという言い伝えがある。岡藩主中川氏の信仰が厚く、中川氏により社殿造営がなされている。

また、古くから三佐地区には腕のいい大工がおり、「三佐大工」と呼ばれ各地で活躍した。とくに明治時代には卓越した棟梁である幸政治郎の活躍によって多数の弟子が育ち、その後長く「三佐大工」としてつづく大きな技術集団をつくるに至った。代表的な建造物としては、野坂神社神楽殿である。昭和30年代以降、三佐は埋め立てによる工業用地造成や区画整理事業などによって景観が大きく変化したが、地元住民によって伝統的な祭礼が維持されている。



野坂神社境内図

### 2) 建造物

#### 野坂神社拝殿

拝殿は、入母屋造棧瓦葺で、千鳥破風をもち、一間の唐破風となる向拝が付く。境内にある改修記念碑によれば昭和6年(1932)に改築されたものであり、これ以前の建築である。



野坂神社拝殿

#### 本殿

本殿は、三間社流造銅板葺で、本殿との間は幣殿でつながっている。拝殿と同じく改修記念碑より昭和6年(1932)に改築されたことが分かる。



野坂神社神楽殿

#### 神楽殿

神楽殿は、幸政次郎の墓誌銘より明治33年(1900)

の建築で、棟梁幸政治郎の最後の作品である。入母屋造棧瓦葺で扉や壁がない三方吹放ち、装飾の無い簡素な造りである。

### とおみだい 遠見台

遠見台は、船が海から三佐の港へ安全に出入りできるよう、土を盛り上げて台を造り灯籠をもうけていた。

三佐の港に岡藩主の御座船が入港する様子を描いた『岡藩船三佐入港船絵馬』(文化10年(1813)) (市指定有形文化財)に「遠見台」が描かれている。

## 3) 活動

### 3) -1 三佐の山車

野坂神社の祭礼を特徴づけるものは、山車の巡行である。三佐の山車は、大分市の他地域に比べて大型であり、また金や赤、緑など着色された彫刻で飾られ、台に歌舞伎や歴史上の人物をあしらった人形が据えられた豪華な造りとなっている。この様な山車のはじまりについては、岡藩主中川氏が参勤交代の帰途、京都で祇園祭の行列をみて、是非領内でも行いたいと考え、三佐の大工及び領民を京都に派遣し山車の製作技術や祭礼の運営方法を学ばせ行ったのがはじまりといわれている。『神社慣例』明治30年(1897)によれば祭礼日は旧暦6月29日で、「六月ハ御幸行等アリ且屋台飾山ヲ出シ神輿ニ付随ス」とあり、現在の山車巡行がこの時点で行われていたことが分かる。この様な山車は、三佐大工の優れた技術によって製作されたと考えられ、現在もその伝統がつづいている。また、山車は江戸時代以来の三佐の各地域ごとに維持されており、三佐地区の各地区には大型の山車倉庫が点在し、区画整理などによって他と変わらない住宅地となった今でも当地域の個性をそこに垣間見ることができる。平成30年(2018)の祭礼では7台の人形山車、2台の太鼓山車、1台の担ぎ山車が祭礼に参加した。担ぎ山車の下には車輪がとりつけてあり、子供たちが引いて巡行するようになっているが、お旅所では大人たちが担いで練り歩く。

山車の建造や維持はそれを保有する地域にとっては大き



遠見台



山車の彫刻



まちを巡行する山車



人形山車

な負担となるものであるが、各地域では人形の製作を含め、定期的なメンテナンスを行いながら山車を維持している。山車によっては明治時代に建造したものを修理しながら使用しつづけているものもある。

### 人形山車



新港



遠見



本町



板屋町



裏町



仲町



仲村

### 太鼓山車



八坂



大村

**担ぎ山車**



**薬師堂**

平成30年(2018)の祭礼に参加した山車の種類と地域名



**新港お旅所横の山車倉庫**



**住宅地の中にある山車倉庫**



**工房で大工によって修理中の山車**



**三佐にある人形工房**

### 3) -2 野坂神社の春季祭礼

春季祭礼は4月28日・29日であるが、これは当初6月であったものが、近年になり昭和天皇の誕生日に合わせて実施されたといわれている。

4月28日は「宵宮」で仲村地区に集合し午後2時に山車が出立、お旅所にて休憩ののち、江戸時代に岡藩船の出入りの際明かりをともした「遠見台」近くを通り、午後10時すぎに野坂神社へと戻る。翌29日が本祭で各町の山車倉庫より山車が出立し、野坂神社へ向う。神事の前に「奉納鉦叩き」が行われ、太鼓を中心に周りに鉦の叩き手が囲み、鉦を上から叩いたり中でバチを左右に動かし側面を叩いたりすることで音を出す。使用される鉦は大分市中心部の夏季祭礼で使用される「チキリン」より一回りほど大きく、バチは先が球形である。

午後1時から発興祭が執り行われ、宮総代、社係、山車の責任者である若連、山車の担ぎ手が参列する。発興祭が終了後、神輿が本殿・拝殿の周囲を時計回りに3回まわる。

その後に、大村町の山車が、神輿がすぐに出ると祭りが早く終わるので神輿の進路を妨害する。神輿が上手く山車をかわし、山車の脇を通り抜け境内の外へ出る。山車巡行の曳き手及び随行者は皆町内ごとのおそろいの浴衣を着ており、「コンコン コンコン」という鉦の音とともに進む。神輿、山車の順に三佐の町を巡行し午後4時半頃に野坂神社に到着し、着興祭終了の手打ちを行う。



神輿と山車の争い



神社境内に集まった山車



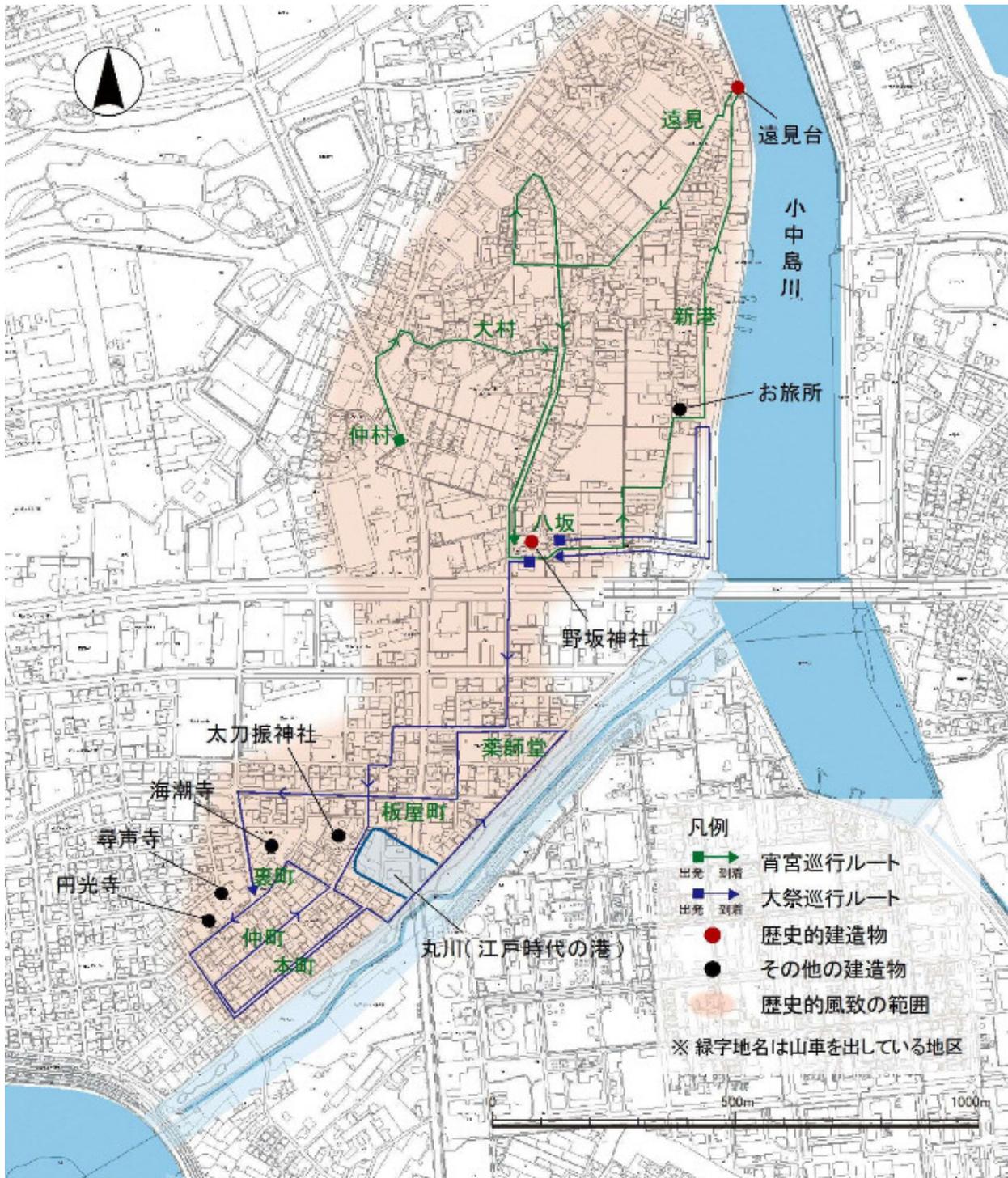
奉納鉦叩き



拝殿の周囲を回る神輿

#### 4) まとめ

最近になって地域の景観や環境は大きく変化したが、祭礼を守り伝えようとする地域の熱意は非常に強く、三佐の祭礼を特徴づける豪華絢爛な山車巡行は守り継がれている。職人の技に支えられ、脈々と受け継がれる地域の伝統そのものともいえる山車と祭礼行事が息づく歴史的風致がみとめられる。



三佐の歴史的風致範囲図